（2）研究発表

栗林一石路とプロレタリア文学について

【日時・場所】　平成21年12月5日（土）13：30〜15：00　松本大学　126講義室
【講　　師】　上田染谷丘高等学校教員　　関秀雄

司会／それでは、講演会に入りたいと思います。講師の先生の紹介を腰原先生よりお願いいたします。

腰原会長／今日は、上條宏之先生、大変忙しいところをわざわざおいでいただきました。このあとも窪田空穂記念館のほうに行かれるということで時間が迫っておりますので、簡単なご紹介を申し上げます。だいたい上條先生については、皆さん、ご承知かと思いますけれど、例えば、たくさんの本の中で、私の手元にある『民衆的近代の軌跡』という地域研究を網羅した本があります。こういうたくさんの著書の足跡につきましては、ただ今、先生からいただきました先生の全仕事という、龍鳳書房から編集されたものがありまして、ここに全部、先生のお仕事の様子が、一目瞭然、わかるようになっております。こういう著書の関係以外に先生は、信毎年鑑を見たら、全国公立短大協議会の会長とか、大学の評価委員とかされておって、いわゆる大学に閉じこもっておられるということではないということです。もちろん、地域の富士見町とか、隣の波田町とか、塩尻市とか、そういう各市町村の町村誌も全部監督で手がけておられまして、皆さん、ご承知かと思います。

この間、松本インターの近くのところで、郷土博物館でしたか、木下尚江の展示会がありましたけれど、その折も木下尚江の関係するところをずっと案内されたかに伺っております。そんなふうに、とにかく長野県のことに関しては、先生は百科事典、生き字引ということで申し上げるまでもないので簡単な紹介で失礼いたします。

続いて、関秀雄先生ですけれども、関先生も、例えば、大塔物語注釈というようなことをきちんと自分で研究されまして、こういう古典から、同じくプロレタリア作家の新田潤ですね、上田市出身の、そういう人たちも手がけておいでです。この大塔物語は、たまたま写本が東京の古本屋に出たものだから、松本大学の図書館で買うように言いましたけれども、そのようにいろいろな方面で手がけておられる先生に研究発表をいただくということであります。大変、かいつまんだ紹介で失礼ですけれども、先生よろしくお願いいたします。

なにしろ、日本史の上條先生は非常に緻密なのですけれど、私は文学で、フィクションでごまかす雑なものですから、大変粗雑で申し訳ないですけれど、先生には緻密なお話をお願いします。レジュメも先生から用意していただいたので、あとでお配りします。

一草舎の社長さんが後ろにおられて、大変意欲的にこの会とかかわりを持ちながら既刊にこぎつけていただいているということです。高橋社長さん、何か一言。いいですか。昔は、高橋社長は、非常に鼻息が荒くて積極的だったのだけれど、最近は、少し大人しくなったのではないかと思うのだけれど、お互いに読書を中心にした生活を尊重していきたいというふうに思います。

あと、上條先生、窪田空穂記念館も、総監督というか、企画を実現されたわけでありまして、本当に地域に根ざした学者で、信州大学の教授から、現在、県短の学長をされているということであります。

司会／それでは、会員の研究発表に移りたいと思います。上田染谷丘高等学校の関秀雄先生お願いいたします。

関先生／皆さん、こんにちは。それでは、つたない発表ですが、ご静聴いただきます。だいたいパワーポイントにそってと言いたいことですが、あっちに行ったり、こっちに行ったりしますけれども、お許しください。

まず、栗林一石路という人は、どういう人かということですが、先ほどもこちらの方から、例の硫黄島の栗林中将と関係があるかというようなご質問がありましたけれども、たぶんないと思いますが、青木村には栗林という苗字が、ある部落にたくさんあるのです。そもそも、お母さんと一緒に養子に入って栗林ですので、そういうこともありまして、栗林中将とはあまり関係がないのではなかろうかと思いますが。

まず最初にレジュメの方向に従っていきますと、実は、この栗林一石路という方が亡くなられてから来年でちょうど50年になります。ということで著作権の関係も50年経って少し緩くなるわけでありますが、地元の小県郡青木村でも、ほとんど注目をされていなかったということで、そのようなことでいいのだろうかと思っているところへ、最近、ここ数年ですが、この人を検証しようという動きがいろいろな角度から出てまいりました。１つは、後ろのほうに、こういった一草舎さんのほうで作っていただきましたもの（「信州大紀行」シリーズ）を、お買い求めいただいた方もあるかと思いますが、私、この会のほかに上田小県近現代史研究会という地元の郷土史をぼちぼちと勉強する会合に、今、入っておりまして、長野大学の教授をやられていて、その前に長野高教組書記長だった亡き松本衛士さんが、そういう組織を立ち上げようということで、発足直前になって、松本先生、突然、お亡くなりになってしまいまして、そのあとを受けて上田高校のほうで定時制に勤めておられます元歴史館においでになった小平千文先生が会長になって、先日も、信濃毎日新聞の記事があったと思いますが、新津先生が事務局をやっています。小平先生、新津先生、松本先生とは、ずっと昔から親しくしていただいたものですから、「お前、国語だけれども、どうだ、俺達の郷土史の会にも入らないか」ということで入れていただいて、いろいろ活動してきたのですが、その中で、青木村についてみんなで、いろいろ見に行ったりしようということで、フィールドワークをしている中で、栗林一石路の、あとで写真をお見せしますが、碑があったのです。ほかの人たちは、みんな歴史に興味のある人たちばかりなものだから、私に「一石路ってどういう人だ」という質問で、うろ覚えの知識で、そこで解説したというあたりから、もっと自分でも勉強したほうがいいのではないかということで、十何年前くらいから栗林一石路という人に個人的に興味を持ち始めまして、いろいろ、ぼちぼちと調べてまいりました。

この間、春（５月）に青木村のほうで、村長さんが統一地方選挙で、３選だか４選だか、当選がありまして、「また俺も、もう４年間頑張るから」ということで、「ついては、よく青木村は、義民の里、義民の里と言われるのだけれども、その辺について、お前らシンポジウムをやらんか」ということで、私どもこの近現代史研究会のメンバーがパネリストになって、シンポジウムをやりましたところ、100名くらいの村の方が集まっていただいて、ちょっと反響もあったのです。ただ一石路についてのシンポジウムではなくて、主に「義民の里青木」ということについてのシンポジウムだったのですけれど、青木という村は、今、小県郡の中では、唯一の村なのです。というより小県郡というものが、今はすでに、皆さんは御存知だと思いますが、平成の大合併で長和町と青木村だけになってしまった。あとは全部上田市ないし東御市になってしまった。私は旧丸子町なのですけれども、当時の政治家の悪口を言うようで大変恐縮ですが、あまり感心しない手段で小泉総理の平成の大合併のときに、何かどさくさに紛れて丸子町が上田市にぴたっとくっついてしまったような感じで、非常に不本意でいるのです、今でも。

青木村というのは、人口的に言っても丸子町の４分の１くらいの規模しかありません。財政規模はもっと小さいです。丸子のように工業団地を持っているわけでもないし、本当に農村地帯と言っていいところです。しかしながら、財政的にもそんなに楽でないと思われるのに、なぜ、隣の上田市とくっつかなかったのだろうというふうなことが、我々のメンバーの中でも疑問ということにな

ってきて、それは、もしかすると一揆の里、義民の里ということと関係があるのではないかというようなところまで、みんなで話を詰めていったのです。確かに青木というところは、歴史上6回、あるいは7回、上田藩に対して一揆を起こしているのです。その都度、大規模な一揆を起こして弾圧をされたときもあり、自分らの要求がある程度通ったときもあるのだけれど、あの小さな青木村で、こんなに、江戸時代から言えば、6回も7回も一揆が起こっているということは、非常に特徴的なことで、全国的にも、まずないのです。ですから青木は義民の里であり、青木は一揆の村だというイメージが、上田市側からの人間には広く浸透しているのです。

あの地域というのは、上田盆地というのは、不思議と、夏、夕立が来るときは、青木村のほうに黒い入道雲がかかると、西からゴォーと夕立が来るものですから、俗に「夕立と一揆は青木から」という、そういうことわざが上小地区にはあるようです。

そういうようなことで、近現代史研究会のほうでそういうアプローチをしている中で、この栗林一石路という人も、そういう自分が生まれ育った里が、義民の里、一揆の村であるという、そういうことが、この人の生涯に何らかの影響を与えているのではないかという観念から「お前は、一石路についてもう少し詳しく調べろ」などということで、やっているわけですが。それから最近、地元で、青木村の中で、たぶん、青木で一番有名なものは何かと言ったら国宝の大法寺三重塔だと思います。俗に「見返りの塔」と言われて、非常に美しい塔なのです。御存知のように、塩田近辺の北条幕府の8代執権の時宗（蒙古襲来のときに執権であった8代将軍）の副将軍的な役目をしていた義政という方が、連署という地位だったその人が隠居をして塩田にやってきて、あの辺を領地にしていたという関係で、鎌倉と塩田は大変密接なのです。直通街道である鎌倉街道もあったくらいですから。

そういう土地柄の中でいろいろなことがわかってきて、鎌倉とも繋がりがあるけれども、もっと古くから言うと、あそこは戌亥のほうから東山道が下りてきている。やはり、小県地方、あるいは東信地方に上方の文化なりなんなりというものが、情報なりというものが、峠を越えて入ってくるのは、一番先が青木であったということから言って、地域的には田舎というふうに思われがちですけれども、実は、大変先見の明のあるところ、あるいは情報の早いところだったのではないかと。井出孫文さんが、秩父について調べられて、秩父困民党などについて調べられて、鉄道の通る前というのは、秩父の十国峠とか、あの辺が、大変重要な、経済的にもそうだし、様々な面でも重要な情報の幹線だったのだというふうに『秩父困民党』の本の何かの中に書いておられますけれど、同じことが青木村についても言えたのではないかということがわかってまいりました。そのようなことをやっているときに、青木村の美術館、先ほど言った大法寺のすぐ下に美術館がございますが、そこの館長の桜田さんという方が中心になって、何かこれは、一石路について村でも取り上げなくてはいけないのではないかと。その桜田さんが関心を持ったきっかけは、どういうきっかけからそういうことをおっしゃったかというと、この一石路さんの息子さんの一路さん、石をとった一路さんです。名前も「かずみち」と言わないで「いちろさん」とおっしゃるのですけれど、この方が、一石路さんの様々な遺品を、横浜の神奈川近代文学館にあらかた寄附をしてあったのですけれど、まだ、出てきたと言って、少し残っていたというものを青木村の美術館に寄附なさったのです。そこからそういう話が始まっていって、一石路についてもちょっとかじったりしているらしい近くに高校の教員がいるらしいなどというので、私も桜田さんに「どうだ」などと勧められて、その辺から、最近、一石路を検証しようという動きがにわかに高まってまいりました。後ろにいらっしゃる一草舎のほうでも、青木村について、一石路について、これから何とか作品集、遺稿集的なものを出していこうということで、来年に向けて、今、取り組んでくださっておりまして、私も多少かかわらせていただいていますが、そのような動きもあるということ。それから先ほど申し上げた村長さんが議会に諮っていただいて、栗林一石路と、今、申し上げた義民の関係をセットにして郷土歴史資料館をつくろうということを村のほうに提案していただきまして、村議会で可決をされたとい

うことで、2010年の間には、そういう施設もできるのではないかと期待をしております。

実は、この（ブックレットの）表紙、子どもが太鼓を打っておりますけれど、青木村義民太鼓と言うものです。この義民太鼓というものは、青木村の小学校、中学校、あるいは、地元の高校生がやっている組織でありまして、この真ん中で太鼓を叩いているのは、うちの高校の、この間卒業した生徒です。後ろのほうで叩いている子の中にも、今、私が教えている生徒がおります。この義民太鼓というものを１つの宣伝にしながら、毎年義民祭というものが青木村で開かれているのですが、義民祭自体は、横山十四男先生の研究その他で、かなり、青木の里と一揆ということについては、いろいろ調べられて本も出ているのですけれど、どうも、栗林一石路については、今まで何も出てこなかったというか、知られなかったというのが実情であります。

まず栗林一石路ってどういう人かというところからいきたいと思います。青木村の細い谷と書いて、公式には「ほそがや」と言うらしいのですが、地元の人は「ほそげ」と呼んでおりますが、そこのご出身です。本名は上野です。青木には上野という苗字がたくさんありますけれど、上野一族で、農家の次男坊で生まれた。お父さんは代用教員をされておって、かたわら月並俳諧、江戸時代以降の流れをくむ月並俳諧をたしなんでいて、月並俳諧の句会の宗匠などもおやりになっていたのではないか。そういうお父さんの影響で、どうも一石路も俳句というものには小さい頃から親しんでおったような感じがあります。本名は、農業の農に夫と書いて、「農夫」と書いて「たみお」です。何かお父さんのこだわりを感じるのですが、お兄さんは、「文夫（ふみお）」、文の夫、弟さんは、公の夫で、「公夫（きみお）」。男三兄弟の次男坊です。不幸なことに６歳の時に、お父さんが亡くなられてしまいます。上野家はそれまで、村でも中程度の農家だったのですが、正直、上田小県というのは、この安曇野のあたりと違って農家の規模が小さいのです。最も、今も上田小県で純農家などというのは、数えるくらいになってしまいましたけれど、私の家も農家だったのですが、田畑あわせて１町歩も持っておれば、なからの百姓という規模です。

上野家はそんなにたくさんの畑、田んぼを持っていませんでした。しかも、細谷というところは、地名のとおり非常に細い谷でして、畑で農作業をしていて石を転がせば、ずっと下まで落ちていってしまうというような、そういう場所なものだから、畑を耕すときは、高い方から下のほうへ耕していく。そうしないと下から上へ耕していくと土が全部下へ行ってしまうというので、まずは、親は耕すときには上から下へ耕すものだと言って、子どもを教育するのですが、それくらいのところの出身ですので、お父さんを亡くされたということは、経済的に非常に苦しい状況に陥ったのではないかと思うのです。そこでお母さんは、やはり、奥さんを亡くされていた栗林徳十さんというお宅へ後妻に入るわけです。そのとき、彼は次男坊ですので上野家の跡を継ぐ必要はありませんからお母さんと一緒について行った。養子に入り、家督を相続したのは24歳ですから、だいぶ後のようですけれども、ずっと栗林家で育ったと、こういうことです。

月並俳句については、皆さん、御存知のことですので、あまりくどくど言いませんが、東信地区は、非常に江戸時代、俳句の熱が高かったようです。北国街道を通しての江戸とのパイプが非常にありますので、お江戸からそういう文化を持ち込む人がいっぱいいるわけです。また、芭蕉も、御存知のように、姨捨の田毎の月の俳諧をされたあと、江戸まで帰っていって紀行を書いたりしていますし、何かお聞きするところでは、８月15日の晩に、姨捨のお寺で句会をやられた次の日の夜、坂城のねずみ宿の人たちが、「どうしても、芭蕉先生、ここで泊まって、俺達に俳句の指導をしてくれ」というような話をして、芭蕉は、８月16日の夜、坂城のねずみ宿で１泊して、句会を指導されているようですけれども。そういう土地柄ですので、おそらくかなり俳諧は盛んであったのではないかと思われます。この辺については、皆さん、御存知のことですので、国語の文学史の授業みたいなことをやってもしょうがないので、省きますが、御存知のように正岡子規が『獺祭書屋俳話』あれを書いてスタートしますよね。定型を守ろうという方面と碧梧桐の新傾向というふうに分かれています。碧梧桐が途中で投げ出したあと、井泉水が自由律派の柱になっていくわけですが、きっ

と井泉水の流れを汲む方向に、このプロレタリア俳句というものがあると言っていいのではないでしょうか。

一石路は、まだ、信州にいて結婚もせず、若かりし頃、義務教育を終わると「お前は、あとはうちで百姓をやって働いてくれ」ということになって、毎日、家で百姓をやっているわけですけれど、非常に成績優秀な方だったもので向学心も強くて、勉強に対する、学問に対する思いが押えられなかったのです。そこで、うじうじしたものを抱えながらやっているところへ、お兄さんが東京に働きに行っておられたときに「東京では、お江戸では、今、新しい俳句をやっている人がいるそうで、こういう雑誌があるよ」と言って、一石路に送ってくれたのが井泉水の「層雲」なのです。だから、一石路は、定型や、そういうものから入ったのではなくて、本人も言っているとおり、井泉水及び層雲から入っているわけです。そういう作品を投稿して、こいつは、なかなかいいというので、井泉水も載せてくれたりしていたのですが、井泉水も御存知のように信州にゆかりの非常に強い人ですので、小林一茶について調べたいということで、長野へ来たりしたのです。そのときに、師匠である井泉水さんがおいでになるからというので、一石路はわざわざ出かけて行っているのです。それで善光寺など、あちこち御案内して、そこで井泉水と一石路とは面識も持ったという関係になります。

義民の村の伝統ということで、農民組合などというものもありましたし、青年団というものの活動も非常に盛んだったようでして、先ほど申し上げたように上の学校へは進ませてもらえなかった分を、そういったところで、彼はいろいろな活動をしたり、それから勉強するという形で、向学心を満足させようとしていたようです。これが「同窓会簿」というので、青木の義務教育の終わった人たちが、引き続き勉強したものや何かを研究、まとめたりとかいろいろしているもので、今日でいうなら研究紀要のような、あるいは生徒会誌のようなものになるかと思いますけれど、こういったところにも様々に（文章を）載せております。ということで、一石路と同じように上級の学校に行かれなかった人たちが、夜学校などというものを開いて、青木の小学校の先生方をお迎えして夜勉強をするというようなことをしたのですが、そういったときの中心にいつもいたようです。

村松というのは、一石路の生まれ育った隣村ですけれども、そこに村松青年夜会という会がありました。これも補習学校という、また、別の、義務教育を終わった方々が集まって勉強されたりするところなのですけれども、そういうようなところに常に通って、向学心を高めていったということです。一石路はそういうような中から、若い頃からすでに反骨の気質というか、そういうものを養っていくわけですけれども、先ほど申し上げたように義民の里である青木の出身であるということも、何らか関係しているでありましょうし、それから、ちょうど青年時代が大正デモクラシーの時代だったということは、かなり大きいことだと思います。のち、東京へ出て行って、改造社の社員になるわけですが、その改造社というのは、御存知のように当時としては総合雑誌として大変な勢いのあった雑誌ですから、その編集をやるということは、一流中の一流の学者や文化人や小説家たちと、常に原稿をもらいに行ったりしながら接していたということで、そういったところでの思想形成というのもあったのではないかと思われます。大逆事件が起こった頃は16歳ですから、まだまだ、そんなに深い考えはなかったでしょうけれど、御存知かどうか、青木の峠を越えた向こうへ下りますと明科村です。今、安曇野市です。そこで、大逆事件でつかまってしまった宮下太吉もいたというようなこともあって、隣村ですから、そういうようなことにも大変衝撃を受けたりしたようです。

栗林家は、今でも残っております。我々、桜田さんと共に、この家をなんとか保存できないかなと思ったのですが、建築の専門家等にお聞きすると、それは莫大な費用がかかるし、あまり保存してもどうかなということで残念ながら見送られましたが、見ていただいてわかりますように、総2階の養蚕農家です。その中にも入ったりして見ましたけれども、非常に大きな家ですが、通常、お蚕さんを飼っているときは、人間が倉庫に出ていって、家の中は全部お蚕さんになるという典型的

な家です。小県は、一石路の頃は非常に養蚕が盛んだったのです。養蚕で嫁さんがお蚕を飼って稼ぐ金は、父ちゃんが畑や田んぼで稼ぐ金よりでかいというくらいのものだったのです。今でも、上田東高校の隣に、お蚕さんの種をつくる蚕種組合というのがございますけれども、上田近辺でつくられたお蚕さんの種というのは、非常に優秀なもので、国内はおろか外国にも輸出されているのです。特に西上田の、（西上田にも塩尻というところがあるのですけれど、塩尻市の塩尻と同じ字を書くのですけれど）あたりには、ずっと江戸時代にお蚕の種で、大変、財をなされた方がいっぱいいらっしゃって、そのお蚕さんの種で金儲けされた方々が、あの上田自由大学を設立された山越脩蔵さんとか金井正さんなのです。あるいは猪坂直一さんという方です。一石路とだいたい同年代なのですが、一石路は、上田自由大学には参加していないのです。これだけ向学心の旺盛の人が、なぜ、上田自由大学に加わらなかったのだろうということは、非常に謎なのですけれど、我々の会の小平会長の推測では、金井正さんや猪坂直一さんとか、自由大学の創立者の方々というのは、要するに大変なお坊ちゃんなのです。セレブなのです。一方、自分は青木の貧しい里で育った、しかも、親父を早くに亡くしまって貧乏して苦労したという、そういう階級的な意識の違いとか、考え方の違いとかというものがあるのではないかと。上田自由大学というのは、高倉テルが来たとか、そういうことでかなり革新的な組織のように思われていますけれど、小平先生あたりに言わせると、中心になっていた人たちは、そういうセレブなお金持ちの息子さんたちだし、そんなには世の中を変革していこうというような方向のものではなかった。だから一石路もそういうものには満足できなかったということが言えると思うのです。逆に言うと、若かりし頃から一石路は、こんなに一生懸命働いても貧乏人は一生貧乏で終わる。金持ちは遊んで暮らせる。こんな世の中はおかしいのだと、そういう革新的な思想というものは若い頃から形成されていたのではないかと思うのです。

青木村美術館の前にあります有名な「シャツ雑草にぶっかけておく」という、彼の最も代表的な句を刻んだ碑があります。これは、この家を守ってくださっている金井さんという方、一石路の小さい頃からの親友の方が、しばらく前に亡くなられてしまって、今、そのお子さんが、この家を守ってくださっています。そのご遺族が、そこの脇に自費で作ってくださった碑です。あともう1つは、義民祭をやるときに、一石路が句を2つ詠んで、それが碑になっているのがありまして、青木村の中には、合計3つ彼の句碑があるわけです。こちらのほうは、「ぼんおんと鳴る鐘きいて畑をしまいけり」当然、自由律から始まっていますので五七五は無視した形のものになっています。青木村美術館に保存されております「義民いまは神にして冬の山はあり」「霜の菊の咲きいづるなほ一輪二輪」これは、一石路自身、大変筆のたつ人で、すばらしい字ですけれども。もちろん自由律です。故郷で義民祭というものが行われるようになったということで一石路が寄せたひとつの句です。これを碑にしたものが別のところにございます。

先ほど申し上げましたように自由大学には参加をしなかった。それは山越脩蔵たちとの階級的な違いということだと思うのです。信濃黎明会という組織も作られているのですが、これも途中から手を引いています。信濃黎明会は、あまり詳しくは研究がなされてないようですけれど、永井柳太郎、あるいは中野正剛というような大変な方々が関与されておられるのですけれど。一石路は青年になりまして、村の青年団活動の中で中心的に活躍をしたということを先ほど言いましたけれど、この青年団が、時報を発行したわけです。公民館報のようなものからスタートしたのだと思うのですけれど、この編集を村のトップの人たちは、一石路たち青年に任せた。その内容というのは、悪く言えば過激な内容さえあるわけです。そういうようなものなのだけれど、村の人たちは、予算的には補助していながら、過激なことを書くようなこの時報に対して理解があったのか、予算を打ち切るとかそういうことを一切しなくて、若い人達に任せていた。従って、この青木時報で、若い人達がいろいろなことを書いて、そこに自分たちの思いとかいろいろなものを載せているわけなのですけれど、この青木時報については、また、ちょっと宣伝になってしまいますが、後ろの一草舎さんで、これから復刻版を出していただけることになっています。

この内容というものは、リストで作ってみたのですけれども、一石路自身、実に多方面にわたる関心を持っているということと、文章を読んでびっくりすることは、非常によく勉強しているということです。先ほどもお蚕さんのお話をしましたけれど、一石路は、青年団活動をしていろいろなことをやっている中で、この時報に「もうお蚕はだめだ」ということを書いているのです。それに対して、ほかの若者から「何をいっているのだ」と言って反論も載っているのですけれど。そういうような議論のやりとりが、この青木時報の中で見られるのです。非常に面白いのです。なぜ、お蚕はだめかというと、これからは合成繊維の時代になる。隣の中国でも農業レベルが上がってきていて、お蚕をどんどん生産するようになってきているし、生糸が世界で飛ぶように売れるような時代は、もう終りである。これからは、安いナイロンとか、ああいったものが出てくるので、お蚕は遠からずだめになるから、農業の将来ということについて検討したほうがいいという、そういう論文を発表しているのです。そういう論文を書くにあたって、数字的、データ的なものもどこかからか、みんな引っぱってきている。どこで引っぱってきているのだろうと思って調べてみるとエコノミストだとか、そういう経済雑誌をどこかから手に入れてちゃんと読んでいる。それで世界経済をちゃんと分析した上で、そういう発言をしているというところは、大変なものだと思います。

しかしながら、一石路は、東京に出て行ってしまいます。それは、やはり村で青年団活動とか、いろいろやっていても限界があるということ。当時、改造社の編集長をやっておられた横関愛造さんと言う方は、上田の塩田の出身の方だったので、この方を頼って出ていきます。そして、横関さんの家にしばらく居候をさせてもらいながら、改造社の臨時社員として働き始める。ちなみに奥さんは、あの学校（青木村の小学校）で勤めておられた女子教員なのです。今の群馬大学の教育学部を出られた、当時としては才媛です。そういう方とどうして知り合いになったかというと、先ほどの青年団の活動を小学校の一室を借りてやっていたのです。ですから、当時、今は女の先生は全然珍しくないですけれど、当時は、こんな田舎の村に、しかも師範まで出られた女の先生が来たなどと言って、おそらく話題になったと思うのです。そういうようなこともやっている間に、一石路たちと同じ建物の中で活動をしていますから接点ができた。どうも一石路と恋が芽生えたようでして、２人は将来一緒になっているわけです。

東京に出て行った一石路は、先ほど言いましたように様々な学者たちと接点を持ちます。あるいは、思想家たちと接点を持ちます。これなどは、当時の住所録です。一石路さんの住所録です。見えますでしょうか。一番上、岡本一平、同かの子、荻原井泉水、小川未明、大内兵衛、大山郁夫という、そうそうたる名前が並んでいます。こういった人たちと、毎日、「早く原稿を書いてくれよ」とか、「今度はこういうことを書いてくれないか」というようなことをやっていたはずです。改造社は、そういうようなことで。岩波と並んで、わり方、左翼系の人たちのものをよく載せる雑誌だったわけです。トップの社長さんは、結構、いい加減なところがあった人だったようです。改造社と言えば、確か松本大学にも雑誌『改造』はストックがあると思います。

一石路が出ていって、しばらくして関東大震災が起きます。この関東大震災の震災の記録誌をつくるのです。これは、神奈川の近代文学館にあったので見せてもらって、写真を撮らせてもらったのですけれど、大変な緻密なものです。これは東京23区内でして、被害の度合いを色で分け、火災がどっちの方向から移ってきたとか、どっちへ移っていったとか、そういうようなことをかなり克明にカラフルに描いたもので、死者の数などもかなり詳しく調べてございます。このような活動をしていたのです。

しかしながら、改造社を途中でやめてしまいます。東京へ出て行って改造社で勤めながら、『層雲』の事務所にしょっちゅう出入りしているわけです。『層雲』は、事実上は、荻原井泉水が自分の私費で運営していた雑誌ですから、師匠である井泉水のお手伝いをしょっちゅうやっているというようなことで、雑誌の編集などもやったかもしれないし、俳句の選定などもやったかもしれません。そういう中で、若干、尾崎放哉、種田山頭火とも接点があったのではなかろうかと思われるの

ですが、彼の日記等を見ても、山頭火あたりと言ったら、今、高校の教科書などでは、自由律俳句と言えば、放哉か井泉水か山頭火と、山頭火は必ず出てくる。ここにも高校の先生方がたくさんいらっしゃいますけれど、私もかつては、自由律というものにあまり詳しくないときは、生徒たちには、「いいか、お前ら、俳句は五七五だと、季語だ、季節だ」と、さんざん、そういう教え方しかしていなかったのですけれど、どうもそればかりが俳句ではないようなのです。ただ、一石路さんは、尾崎放哉、特に山頭火とは、あまり親交を結ぼうとしてなかった。というのは、１つに、山頭火が、そこらじゅうへ突然放浪の旅へ行ってしまうからです。だから東京にあまりいないということがあります。もう１つは、山頭火という人は、悪く言えば世をすねたというか、人生の裏表、全部どん底まで見てしまった、開き直ったような感じのところがあります。ですから、どうも一石路とはあまり合わなかったのか、接点があまりない。

一方、一石路は、だんだんに東京へ出てきて、そういう左翼的な思想家たちと接していく中で、左翼的思想を煮詰めていくようでして、当時、大正末期から1929年の世界大恐慌（ニューヨークのウォール街から始まった世界大恐慌）で、たちまち日本は経済がどん底になってきます。それと共に、労働争議が東京あたりでものすごく頻繁に行われている。そういうものを目で見ておりますから、だんだんに左翼的な方向にどんどんどんどん行ったのではなかろうかというふうに思われます。これは、青木村の美術館に息子さんが寄附してくれた日記ですが、大正13年頃の日記で、これは、なかなか読んでいくと面白いです。だんだん、彼は左翼的な方向に行くわけなのですけれども、それに対して当然ながら様々な弾圧が加わってくるということで、特に小林多喜二の虐殺とか、山本宣治が右翼のテロに殺されてしまうということもあったりして、非常に厳しい状況の中で左翼的にプロレタリア俳句というものをやっていくと。井泉水は、非常に一石路に期待をしていて、自分の後継者だとさえ思っていたらしいのです。ところが、こういう時代の中で、一石路は、どんどん左翼的な方向に行ってしまい、プロレタリア俳句という方向へ旗揚げしていこうとする。それに対して井泉水は、それはだめだ、そういう左翼的なものはだめだと（反対する）。実際、その辺を一石路は、我が師匠の限界だと言って痛烈に批判するのです。確かに大日本文学報告会あたりにも役員として井泉水の名を連ねていたりしているので、やはり、井泉水としては、自由律ということはいいけれども、自由律をさらに思想的なものにまでもっていくということには、どうしても井泉水自身はうんと言えなかったようなのです。ですが、一石路も何とか師匠を意識改革しようとするのです。師匠の井泉水は、「いやだめだ」と。そこで、何年かそういうやり取りが続くのですけれど、結局、決裂してしまうのです。ですから、井泉水にとっては、自分の後継者とさえ期待していた一石路に去られたということは、非常にショッキングなことだったと思うのですけれど。
これは、別所温泉にある山本宣治の記念碑ですけれど、故郷にかかわりのある人が暗殺されたということも、一石路にとっては、大変ショックだったと思うのです。

ついに、一石路は弾圧を受けまして昭和16年２月５日早朝、治安維持法違反で検挙される。２年半ほど獄中におりますから、昭和16年に２年半を足していただくと、昭和18年の秋くらいですが、やっと出獄するのですけれど、刑は禁固２年、執行猶予３年なのですが、判決が出たのがうんと遅いのです。今だと、この間のマリファナを吸った某女優さんなどは、すぐ判決が出て、今は、どこかの学校で授業に行っているそうですけれど、当時は、要するに未決囚ですね、とにかくつかまえて豚箱にぶち込んでおけ、こいつうるさい野郎だから、ということでぶち込まれて、刑も何もないまま、取り調べもちゃんとに行われないまま、ただ、毎日獄中で過ごしている。だいぶたってから、「お前は禁固２年だ、執行猶予をつけてやる」、「あ、そうですか」で、出てくる。出てきた頃には、昭和18年も後半ですから、戦争はだいぶ進んでいた。

その前に改造社を辞めて、同盟通信に入るのです。これは、今で言うと共同通信・時事通信ですけれど、当時は、国策会社になってしまって同盟通信という名前になりますが、別に俳句でおまんまを食っていたわけではなくて、一石路という人の本職は、上京後しばらくは改造社の社員、それ

から同盟通信の社員ということになってジャーナリストです。つい先日お亡くなりになった田英夫さんが、もしかすると一石路と同盟通信で、ほんの少し仕事を一緒にしていたことがあるのではないかと思うのですが、その辺、はっきりしないまま、田さんは亡くなられてしまいました。

一石路は、若い頃に時報をつくったくらいですから、やはり、ジャーナリズムを通して、言論の世界を通して、自分の目指す方向をなんとか実現しようというのがかなり強かったのです。従って、俳句のことばかりが強調されますけれど、本職はジャーナリストであります、ということは、忘れないでいただきたいと思うのです。同盟通信の古野さんという社長さんは、大変すばらしい方で、治安維持法でつかまった、自分の会社の社員である栗林一石路を首にしなかった。しかも、社会部長というかなりの地位にあったのですけれど首にしなかった。出獄してきたあと、すぐ、仕事に戻すというのは、まだ、戦争をやっているし、当局の目も憚られるからというので、「お前は、田舎のほうにいろ」ということで、何をしていたかというと、八ヶ岳の山麓で一生懸命開墾をしていたのです。その開墾というのは何かというと、松代大本営の工事が行われていて、本土決戦になったときには、同盟通信社も松代の大本営に逃げ込む。そして穴ぐらの中で活動を続ける。ついては、食料も必要だというので、八ヶ岳あたりの原野を買って開墾をさせていたみたいです。「おまえ、そこへ行って、百姓の出身だし、やってこい」というので、ここでやっているうちに終戦を迎えたという、そういうことのようであります。この一石路に限らず戦争を遂行していく中で、反対をする人たちに対しては、当然のごとく弾圧の手が伸びていくわけですけれども、正直、一石路が弾圧されてつかまった頃は、ほとんどめぼしい人たちは、すでにみんなつかまっているのです。だから最後の最後のほうです。変な言い方をすれば、別に栗林一石路など獄中に入らなくてもよかったくらいのものなのだけれど、その一石路さえもつかまえたということは、とにかく問答無用で、つべこべ言うやつは、みんな豚箱にぶち込んでおけという、そういうことだと思うのです。弾圧のピークは、もっと前ではないでしょうか。小林多喜二が暗殺をされたあたりというのが、あの辺が弾圧のピークなのかなというふうに思いますけれど。

ある日突然、戦争というものは始まるのでなくて、様々な形で戦争へのプロセスというものは作られていくと思うのですけれども、先ほど申し上げた文学報告会とか、あるいは大政翼賛会とか、そういったものもあります。治安維持法による露骨な弾圧、あるいは、山本宣治暗殺のようなテロ、議会が無力化していくというようなこと、様々なプロセスを経て、反対している者は、完全に口を封じられる。と同時にプロレタリア文学というものも、ガーッと盛り上がってきて、ジャンと潰れてしまうということになります。

一石路はジャーナリストとしてどんな活動をしていたかということですが、共同通信、同盟通信で、実は中国戦線へなどにも出かけて行っているのです。当時の写真があります。なぜか、偶然、「麦と兵隊」の火野葦平と軍隊でばったり会ったりなどしておるわけですけれど、その時の従軍の様子を本に書いているのです。『兵隊とともに』という本があるのですけれど、それを読むと、戦争に批判的なことを書きたいのだけれど、しかしながら、これだけ弾圧が強まってきている、それから、同盟通信という自分の勤めている会社は、国策新聞社みたいになってしまっているということで、はっきり戦争について批判的なことを書けないもどかしさを抱えながら、そういう本を書いております。どんどん日本は、軍国の方向に流れていくわけですけれど、一石路は、小林多喜二のように徹底的に反対をして、弾圧にあって殺されてしまうというようなことではなくて、実は、何とか侵略戦争をやめさせるための方法はないかということで、近衛文麿の運動にちょっと幻想を持つのです。近衛文麿という人も、軍部の暴走を押えるために、「新体制運動」を起こします。それに幻想を抱いた彼は、皇紀2600年式典に出席しているのです。これは昭和15年です。

その時吉川英治らと撮った記念写真が残っています。ですから、そういうところに招かれるということは、言論界においては相当な地位にまで行った人なのです。だけれども左翼的な思想を持っていたということで、最終的には弾圧され、獄につながれるということになります。栗林農夫殿と

いう「保釈決定書」があります。「おまえ、獄中から出してやるから、ついては、保護観察だから好きなことをやってはいけないよ」というようなことが書いてあります。保護観察の保証人は、先ほど言った古野社長が「私が保証人になりますから」ということで出獄をしております。それから裁判にも行かなくてはいけないのですけれど、そのようなことをやりながら終戦までは終わったということです。金井才二郎も身元引受人、横関愛造さんも身元引受人になってくれたようです。蓼科で開墾をしながら終わったと、これが、当時の同盟通信が、蓼科山麓に開墾した農場ということで、ちゃんと写真も残っております。

そういうことをしながら戦争が終わった。先ほどの、近衛の新体制運動というものに幻想を抱いた自分を戦後になってから自己批判をしておりまして、そういう文章も実際に書いてあります。近衛が中心になった大政翼賛会の写真もあります。彼は、戦後になってすぐに、自分が迂闊にも近衛文麿の臣道実践運動に参加してしまったということに対する自己批判をすると共に、無謀な戦争に日本が突き進んでしまったことは、言論の自由がなかったということ、あるいは、本当に民衆の生の言論というものがきちんと報道をされなかったということが大きな原因だということで、同じ同盟通信社にいた松本重治さんと一緒に「民報」という新聞を発行しております。しかしながら、ＧＨＱによって、ちょっと過激な新聞だというのでにらまれて、１年そのくらいで廃刊になってしまったようです。ただ、写真製版したものが全部残っていますので、新聞自体は保存されております。この中に松本さんと一緒に一石路も加わっている。徹底的に新しい時代は、新憲法のもと民主主義を貫くべきだということを、この「民報」という新聞は、強くアピールをするわけなのですけれども、不思議と一石路は、何かの文章は書いていないのです。何を書いていたかというと、毎日、川柳を５つずつ隅のほうに載せているのです。「民報」というものは、あまり知られてないのですけれども、非常に評価をしていい新聞ではなかろうかと思うのです。例えば、昭和20年12月８日の記事で、はっきり、天皇に戦争責任はあるというようなことをいち早く謳っているのです。当然、「中央公論」、「世界」、「展望」なども作られますけれども、同盟通信での煮え切らないというか、思うことができなかったことを戦後になって思い切りやろうということでやっていくわけです。

戦後になりまして、日本共産党にも入ります。これは、あまり知られていないのですけれども、ミチューリン農法というものの普及をやるのです。ミチューリン農法は、どういう農法か、おそらく御存知の方はあまりいないと思いますが、簡単に言えば、私も極初歩的なことをやっていますが、例えば、冷蔵庫に種をとって置いて一冬越す、そして、それを畑に蒔くと、２割、３割収穫量がふえるのです。ソ連のミチューリンという人とルイセンコという人が、科学的に生物学者が解明をした農法だそうでして、寒い信州にはぴったりだということで、伊那のほうだとか、別所温泉とか、小県近辺で、かなり、この農法の普及運動もやっております。これは、あまり注目されていないので残念なのですけれども、一石路という人の幅広い活動の一つの側面を示していると言っていいのではないかと思います。

俳句の世界では、新俳句人連盟という組織を作りまして、引き続き自由律及びプロレタリア俳句の流れをくんだ組織を中心になって立ち上げているわけです。ただ、残念なことに、昭和36年結核を患ってお亡くなりになっております。この時の、お見舞をくれた人たちの名簿ですけれども、そうそうたる名前が一杯書かれていて、いかに幅広い人たちとのおつきあいがあったかということがわかります。

俳句の世界に戻ると、彼は、戦後になってからは、意外や意外、定型もそう悪くはないよというようなことを言っているのです。これは、定型の句です。「夏来るといくさに荒れし髪を梳く」という。五七五ですね。ちゃんと季語も入っております。そういうようなことで、晩年の一石路は、師匠の井泉水と激しく対立して飛び出していくというような方向から、また少し変わって、俳句というものは、全面的に五七五を否定するとか、そういうものでもないかもしれんというようなことを言っております。実は、左翼陣営の間では、「プロレタリア俳句とか、プロレタリア短歌とか、

そういうものはだめだ。俳句や短歌などというものは、要するに過去の時代の上流階級の人たちの芸術であって、そのようなものは否定されるべきなのだ」と、非常に過激な考え方が、一石路がプロレタリア俳句を旗揚げしようとしていた頃に起こるのです。ところが、一石路は、「いや、違う」と、「それは、そんなものじゃない」ということを言うのです。

例えば俳句、俳句というものが、なぜ、長いこと何百年にもわたって日本民族に愛されてきたかと言ったら、日本語独特の韻律というものが、やはり俳句にあるわけだということを言うのです。従って一石路は、そういう俳句、短歌というものは、過去の上流階級の人たちの芸術だから否定されるべきだという考え方には強く反対をしているのです。だけれども、相も変わらず五七五で季語というような、変わり映えもしないようなことをやるのではなくて、五七五を少し飛び出した形もいいだろうし、俳句というものは、政治だ、国家だ、なんだかんだなどというような、思想だなどというものを俳句に入れてはいけないという考え方があるけれど、それは違うのだ、入れていいのだ。俳句や短歌で、人生や思想や政治や何やら、時代などを語っていいのだと、そういう考え方なのです。ですから、一概に否定してしまうべきものという考え方は、持ってはないわけです。

青木村の美術館に残っている遺品などは、奥さんが使っていた籠とか、それから引き出しだとか、こういったものがたくさんあるのです。ところが肝心要の彼が残した日記だとか、創作ノートだとか、そういったものは、ほとんど神奈川県の近代文学館のほうに行ってしまいまして、最近、桜田館長を中心に、我々、神奈川近代文学館のほうにお願いをして、一路さんが、それの引受人ですから息子さんの一筆も書いていただいて申請をして、我々「一石路を語る会」の人たちが行く分には、門外不出の資料というものも見せていただけるということにはなりました。神奈川近代文学館のほうに、どうも相当いいもが、いろいろあるようです。

彼の小学校の通知票、成績表です。ほとんど甲という、大変優秀だったことを示しています。そういう遺品はあるのですけれど、もう少し文学的な、例えば、句作ノートなどももっとあればいいなと思うのですが、たいがい神奈川に行っております。

例えば、創作ノートでいろいろ直してありますけれど「とろけた鉄のようにメーデーの列が長引く」などというのは、いかにも労働運動を風刺しています。「貧乏の子ら君が代を歌い納めめでたし」など、かなり皮肉っぽい歌です。「労働大衆の歌のうずもりも渦巻いて若葉なり」とか、これが俳句かいというような。これをもっとさらに広めていったのが橋本夢道さんです。橋本夢道さんの作品は、もっと長いです。正直、ほとんど詩に近い。だから、一石路も自由律ということをやり、しかも、この中に時代とか、思想とか、政治とかというものを入れているのだけれど、これをどんどんどんどん盛っていくと詩になってしまう。だけど、やはり、俳句というものの日本語独特の韻律というものも捨てがたいのでというところで悩んでおられたのかもしれないですね。

プロレタリア文学の流れについてですが、どなたもご存じの全日本無産者芸術連盟（ナップ）、そのあとナルプという組織になりますが、その下に日本プロレタリア何々連盟というのが、いっぱいあります。そういったものの１つの流れとしてプロレタリア歌人連盟だとか、一石路たちのプロレタリア俳句の組織というものがつくられていくわけです。弾圧を受けていく中で、何とか生き延びを図るために、1931年頃、コップというものもつくります。その傘下にプロレタリア俳句連盟の一石路たちも入っていくのですけれど、昭和７年、1932年頃からコップに対する第２弾圧もあるし、日本共産党も潰されるという中で、左翼運動は一挙に終息に向かってしまうということになります。従って、一石路がプロレタリア俳句というものを継承し、活動していた頃というのは、まさにプロレタリア文学が最後を迎えようというとき、昭和の初期ということが言えるのではないでしょうか。

青木村で、これからそういうことでプロレタリア俳句について、そして一石路について広く検証していこうということで、最近パンフレットを作っていただきました。今までに出てきた写真もずいぶん入っています。若かりし頃の結婚したときの写真などもあります。

一石路ってどういう意味かというのが、これが未だに本人がこういう意味でつけたということが

わからないのですが、どうも「石ころだらけの道」という意味のようです。だから、石ころだらけの道だから非常に歩きにくいわけです。真っ直ぐにすいすいと歩いていかれないというだけのその石を１つ１つ除けながら歩いていくしかないのだというような名前のようです。息子さんは、先ほど言いましたように石がないもので、なぜ、一路とつけたかというと、ようやく邪魔な道ばたに転がっている石をどけることに少しずつ成功してきたので、石をなくして一路だなというふうに言ったそうですけれども、本当かどうかわかりません。

彼は、そういうことで、プロレタリア芸術運動のリーダーだったわけですので、「俳句芸術論」という彼の本があります。こういった本を３冊ほど出して、論文をいろいろ書いております。句集のほうもありますが、代表的なのは、３つの句集をダイジェスト版にしたものです。これは、古本屋さんなどには、まだ、あるかもしれませんが、この辺は、かなり厳しいです。『行路』という詩集も、ほとんどないかもしれません。私は、古本屋で見つけて買ったのですが、定価50銭。買った方が、カネヒラさんとおっしゃるのかな、ここに昭和20年と名を書いている。こんなものを古本屋で手に入れましたけれど。新書版で比較的わかりやすいのは、岩波新書でも書いています『俳句と生活』という本。ところが、最近の岩波新書は、結構内容的には平易なもあると思うのだけれど、一石路が戦後間もなく書いた岩波新書の『俳句と生活』というものは、とてつもなく難しい論文です、読むと頭が痛くなるほど。ただ大変すばらしい内容だとは思っています。日本の短歌や俳句などの歴史、芭蕉から始まって何から何まで全部分析をした上で、今、申し上げたようなこと、僕は、こういうところに到達したのだということを書いていますので、すばらしい論文なのですが、あまり一般受けがいい論文では、なかったようですけれど。

これは、先ほど言ったヤロビ農法というものにも取り組んでいるのですけれど、これも古本屋で見つけたのですが、そういうような活動もしているということです。

あとは、新俳句人連盟から出している「俳句人」という雑誌に一石路の亡くなったときの追悼が４回にわたって追悼本が出ていまして、これで、かなり彼についてのことはわかります。それから、角川で出している雑誌「俳句」でも、一石路が亡くなったときに特集を組んでいます。ですから、その方面の自由律やプロレタリア俳句、そちらのほうでは栗林一石路という人は、理論的にも大変な方だったということがわかると思います。作品も一生涯の間におそらく数千作っているだろう。その中からダイジェスト的に、これでも２千近くですか、集録されているのですけれど、気に入らないって本人が捨てたものとか、いっぱい、どこかに創作ノートなりなんなりとして残っていると思うので、そういうようなものも調べ上げていけば、彼の作品の全体像がいろいろ明らかになってくるのではないかなと思います。先ほど山頭火について申し上げましたけれど、彼の有名な「シャツ雑草にぶっかけておく」というものは、数えていただくとわかりますが14音です。これは、短律ですよね。これをどうも一時期山頭火と一緒に目指していた形跡があるのです。その代表が尾崎放哉の「せきをしてもひとり」とか、「入れ物がない両手で受ける」とか。「せきをしてもひとり」などは、９音です。でも、それは、一時期のことなのです。そのうち、今度は、短律というものはあまりやらなくなっていって、そしてプロレタリア俳句というものに至ったということになりますが、でも、彼の理論を簡単に言うと、橋本夢道さんのようにやたら詩に近いような、そういうものでなくて韻律というものも大事にしながら、しかし五七五の枠は超えていくというような内容のものを目指していたのではなかろうかと思います。

では、そのようなところで、つたない話でしたが、お話しさせていただきました。